

2008年11月1日(毎月1日発行)通巻359号 1979年2月2日 第三種郵便物認可 ISSN 0389-0988

Green Power

森林文化協会

# グリーン・パワー

日本の林業地

天竜(静岡)

味な風土記  
おやき



11  
2008

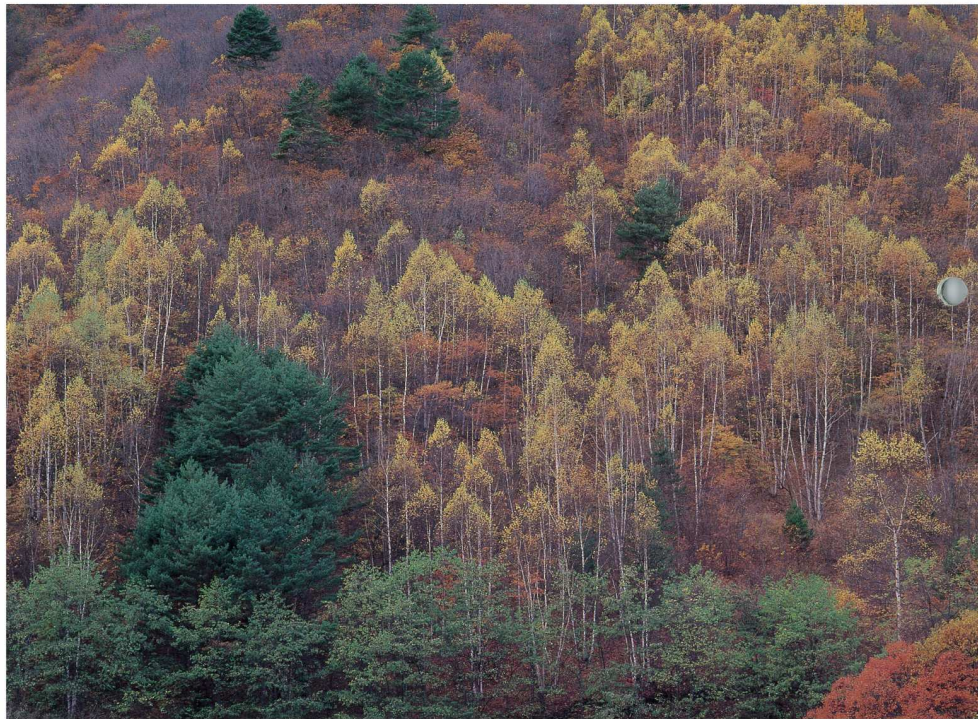


写真:川隅 功「秋の青くらべ」長野県松本市(旧赤川村)

## フットパスに魅せられて 17

### 黒松内町で国際フォーラムが開かれた

エコ・ネットワーク 小川 巖

8月23、24日の2日間、北海道の黒松内町で「フットパス国際フォーラム」が開催された。北海道で本格的なフットパスづくりが始まったのは、今世紀に入ってからである。その歴史はせいぜい10年ではない。黒松内町が取り組みを始めたのが2004年からだから、5年くらいしか経っていないことになる。この間に役場と町民主体のボランティアグループが一体となって整備を進めた結果、町内にも本(総延長二十数km)のフットパスが誕生し、数本が新たに加わるところまで来た。この勢いを加速させ町内のフットパスだけでなく、フットパスそのものを広く社会にアピールする狙いが込められている。

1日目は午前中に10kmのフットパスを参加者全員で歩いた。午後は環境学習センターでフォーラムを開催した。会場は120名の参加者が詰めかけ熱気を感じるほどであった。参加者の内訳は町内と町外でほぼ半分ずつで、道内各地からフットパス活動に携わっている人々や歩くのを楽しんでいる老若男女が集まった。本場イギリスからは、ランブラーズ協会ウエールズ地域事務局のマイク・ミルズさんをお招きした(もう一人の英国人は急病のため欠席)。道外からは東京・町田市を中心に

フットパス作りを展開している「NPO法人みどりのゆび」事務局長の神谷由紀子さん、道内からは根室市の酪農家集団「ABIMOBILE」の伊藤泰通さん、そして地元黒松内町フットパスボランティア代表の新川幸夫さんがパネリストとして加わった。



会場風景

パネルディスカッションに先立ってミルズさんによる「ウエールズにおけるフットパスとウォーキング事情」と題する基調講演があった。ランブラーズ協会は70年以上の歴史を持つ英国最大の歩行者団体である。イングランドとウエールズで18万人の会員がいるという。フットパスを整備する段階はとうの昔に終えたといつてよく、今日では土地所有者による様々な歩行妨害をいかにして円満に解決するかが、大きな課題であると語ったのが印象的だった。その点、フットパス作りが緒についたばかりの日本の実情とはかけ離れているとも言える。しかし多様な所有者の了解があつてこそ支障なく歩けるのだから、ミルズさんの講演はわれわれにとってまさに近未来の構図と

考えることもできる。パネルディスカッションでは、各地各様の個性的な取り組みが紹介された。切り口はどうであれ、歩く道が、地域づくりに結びつく点で共通していたように思う。そのところが自分の健康の維持向上を目指すウォーキングとは異なるのではないかと改めて感じた。来年で8回目を迎える英国フットパス歩きは、ミルズさんのご案内でウエールズ地方を歩くことも決まった。

2日目は特産品の加工施設「トワヴェール(手づくり加工センター)」がゴールになった。10kmのコントロールサイドを歩き、併設のレストランで地場産のハム、ソーセージ、チーズを主体とした昼食となった。広々とした牧草地を見渡せるロケーションだけにくつろいだ雰囲気での昼食となった。2日間にわたって二つのコースを歩いたのは黒松内を知る好機になったようだ。

黒松内での取り組みは歩いて汗を流すだけではなく、地場の農産物を食に加えることで、フットパスの魅力を一層高めているに成功しているように思える。



地産地消の昼食メニュー